振付創作プロセスにおけるコンテンポラリーダンス作品の変容 －環境との関係に着目して－

How Does the Environment Influence the Creating Process in Choreography? : The Case of Contemporary Dance Production

赤木 満里奈[†]，野中 哲士[‡]
Marina Akagi, Tetsushi Nonaka

[†]神戸大学，[‡]神戸大学大学院人間発達環境学研究科
Kobe University, Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University
marina753225@gmail.com

Abstract

Contemporary dance productions have been performed not only in the theater but also outside, for example, in the forest. That type of creation is called 'Site Specific', which means the creating process is based on the environment. The purpose of this study is to clarify that how the environment influences the creating process in choreography, focusing on the intentional changes by choreographers. I analyzed some video data of two contemporary dance productions' rehearsals from directions given by choreographers and director in the data. In order to recognize the intentions of directions, I also conducted interviews with choreographers. It was found that the content of directions had changed across rehearsals, which reflected the change of environmental settings.

Keywords — creation, choreography, contemporary dance, environment

1. はじめに

舞踊は芸術として発展を遂げる中で，劇場で踊られる様式が確立した．しかし，1970 年代以降ポストモダンダンスからコンテンポラリーダンスへと舞踊の流行が移り変わる中で，従来の劇場空間にとどまらず，美術館，街中や森林などの環境においても作品が上演されるようになった[1]．このように，表現活動の基盤を場の特殊性に依拠するものとして捉えられることは「サイト・スペシフィック」と呼ばれ，近年のコンテンポラリーダンスの特質の一つであると考えられている[2]．では，舞踊作品において，その創作プロセスの中で環境はどのように影響するのか．コンテンポラリーダンスにおいて，振付家の動きの創作についての実証的な研究は見受けられるが(中野ら[3]、Kirsh ら[4]、Kirsh[5])，一つの作品へと統合されていく詳細なプロセスや，創作環境に応じた動きの変容については検証されていない．

2. 目的

そこで本研究では，振付創作プロセスの中で環境との関係性による作品や動きの変容を実証的に明らかにし，振付者による意図的な変容をみることを目的とする．

3. 方法

3．1．対象

神戸ビエンナーレ 2015 主催, 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部の相互協力協定事業であり, 2015 年 10 月 25 日に兵庫県立美術館屋外大階段にて上演された, Site Specific Dance Performance #5 【動物の謝肉祭】より「森の奥のカッコー」,「白鳥」の 2 作品を選択し, 兵庫県立美術館と神戸大学発達科学部身体表現スタジオで行われたそれらのリハーサル動画ならびに本番の上演動画を対象とする．「森の奥のカッコー」は，2 分 20 秒程度の，計 7 名での神戸大学学生による振付作品であり，「白鳥」は，3 分程度の，計 4 名での神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授，関典子氏による振付作品である．なお, いずれも演出は関氏によるものである．

3．2．兵庫県立美術館屋外大階段

安藤忠雄氏による建築である兵庫県立美術館の北口を通り抜けた場所に位置している．海側から山側に向かって 1 階から 3 階ほどまでの階段があり，演出者や観客はその 2 階部分に座り，演目を鑑賞する．また，舞台となる場所と海を隔てる大きな壁には，窓や扉らしき空間があり，その壁の南側には安藤氏の依頼によって, 元永定正氏が制作した立体作品「きいろとぶるう」や，ヤノベケンジによるオブジェ「Sun Sister」が展示されている(図 1，2).

図．1

図．2

3．3．作品ごとの場所設定

「森の奥のカッコー」では，上記の場の中で，扉のある壁から元永氏の「きいろとぶるう」までの空間内で踊ることが設定されていた．また，「白鳥」では，壁の内側にさらに人工芝によって正方形に区切られ，その中で踊ることが課された．

3．4．方法

方法としては，リハーサル動画の中での振付の変更や，出される指示の内容を項目別に分類し，かつ振付・演出者にインタビューをすることで，その意図や効果，環境がどのように影響しているかについて分析する．

4．分析１　項目への分類

4．1．項目の設定

「森の奥のカッコー」は，スタジオと兵庫県立美術館での 12 試行を分析し，基準を 2015 年 9 月 21 日のスタジオでの試行に設定した．その中で出された指示を分析した結果，1）演出者による指示 7 項目，2）周囲との協調に関する指示 3 項目に分類された．

「白鳥」は，スタジオと兵庫県立美術館での 8 試行を分析し，基準を 2015 年 4 月 28 日に兵庫県立芸術文化センターにて上演された関典子氏の初演に設定した．その中で出された指示を分析した結果，1）演出者による指示 6 項目，2）周囲との協調に関する指示 3 項目に分類された．

なお，周囲との協調に関する指示とは，演出者によってなされた指示の中で，筆者がそれらに相当するものであると判断し，分類したものを指す．

また，リハーサル動画を観察した結果，振付や構成に変更が見られ，これらについても項目を設定した．「森の奥のカッコー」では，振付の変更・追加・タイミングの変更・配置の変更の 4 項目，「白鳥」では振付の変更・追加・正面方向の変更・配置の変更の 4 項目に分類した(表 1，2)．

4．2．指示項目内容

各指示内容について述べる．まずは動きに関する指示だが，これには直接的なものと間接的なものがあった．直接的な指示は，「左手は頭の後ろ」のような明確な動きを示すものであり，間接的な指示は，「クリアに」のような抽象的なものである．作品性に関する指示は，その作品の解釈に関わる指示であり，「ミステリアスに」などとイメージを伝えるものが多くあった．目線，表情，方向，タイミング，配置の指示は文字通りそれらを指摘するようなものだが，多くは「遅い」「ラインが乱れがち」のような，理想とするものに届いていないことを示す指示であった．

表 1．森の奥のカッコー

		9月21日① スタジオ	9月21日② スタジオ	9月21日③ スタジオ	9月30日 美術館	10月4日① 美術館	10月4日② 美術館	10月10日 美術館	10月11日① 美術館	10月11日② 美術館	10月17日 美術館	10月18日 美術館	10月23日 スタジオ
振付面	振付の変更	基準		1	1			2					
	振付の追加		1	1	1			2			1		
	タイミングの変更		2	1	1								
	配置の変更		1		1			1			1		
演出者による指示	動き(直接的)		2	5		3	7		2				
	動き(間接的)		1	2	2	2	2	1				2	
	作品性		1	3		5	2	2					
	目線			1	1	2	1		1			1	
	表情							2				1	1
	タイミング		2	3	1			1					
	配置			1	3	2	2		2			1	1
周囲との協調に関する指示	場所との関係				2		4		2			1	
	演者との関係(群)			4	3	7	3	1	1			1	1
	観客との関係				1	3						1	

表 2. 白鳥

		4月28日	9月30日	10月4日	10月10日	10月11日①	10月11日②	10月17日	10月18日	10月23日
		芸文	美術館	美術館	美術館	美術館	美術館	美術館	美術館	スタジオ
振付面	振付の変更		2							1
	振付の追加							1		
	方向の変更		1		3	1		1		
	配置の変更			1	2					
演出者による指示	動き(直接的)		5	5					2	1
	動き(間接的)		1	5	1				2	1
	作品性	基準		4					4	2
	方向		3	5						
	タイミング				1					
	配置		2	1						
周囲との協調	場所との関係		2	2						1
に関する指示	演者との関係(群)				1				3	1
	観客との関係									

5. 分析 2 環境による変化

5. 1. 項目の推移の特徴

まず「森の奥のカッコー」について述べる．基準の試行と兵庫県立美術館での 1 度目の試行とを比較すると，踊る時の位置などに関係する配置の指示が増加している．また，兵庫県立美術館での 1 度目と 2 度目の試行を比較すると，具体的な魅せ方などに関係する動きの指示が増加している．このことから，1 度目である程度環境へ対応できたため，2 度目からは観客を意識した指示になっていっていることが分かる．演者との協調に関する指示はスタジオでも出されているが，空間や観客との協調に関する指示は兵庫県立美術館での試行以降に出されていることからも同様のことが言える．さらに，兵庫県立美術館での 3 度目と 4 度目の試行を比較すると，多数の振付変更が行われている．

次に「白鳥」について述べる．兵庫県立美術館での 1 度目と 2 度目の試行を比較すると，全体的に指示の数が大幅に減少している．また，観客との協調に関する指示がほとんどなされていないことも，特徴として挙げられる．振付・演出者へのインタビューにより，1 度目と 2 度目の試行の間に，振付や構成の整理をするための時間が設けられ，そこで演出上の問題が解消したことと，群舞として魅せるのではなく，個々の感性で強く踊ることを意図した作品であったため，解釈を共有した後に指示をする必要性がなくなったことが，これらの特徴の理由として考えられる．さらに，インタビューにより，作品の中で複数回正面方向の変更を施したことについては，観客に対して，演者が合わせ鏡になっているかのように違う面から魅せたいという意図があったことが判明した．

5. 2.「森の奥のカッコー」の振付変更理由

「森の奥のカッコー」の兵庫県立美術館での 3 度目と 4 度目の試行の間の振付変更は，回る動きをほかの動きへと変えるものであった．振付者へのインタビューによると，配置をみせることを重視する作品だったため，回ることによってそれが崩れることを防ぐという意味と，スタジオと違い兵庫県立美術館屋外大階段の床はコンクリートのため，回りにくさの解消という，環境に対して調整する意味であることがわかった．また，兵庫県立美術館での 6 度目と 7 度目の試行の間の振付追加は，全員が同じ動きをするユニゾンに入る前に付けくわえられたものだった．こちらもインタビューによると，スタジオで見ていたよりも動きが地味に見えたため，一度場をしずめて全員でそろえてから動き出すことでより効果的にユニゾンを魅せるという意図があった．

5. 3. 配置における環境の利用

スタジオと兵庫県立美術館で大きく違うことは，鏡がないことである．そのため，正確な配置につくために利用した環境がたくさんあった．空間的側面から述べると，舞台となる空間内の壁の端やベンチ，客席階段側の手すりの位置，芝生の中などを基準に配置を決めていた．またその他に，演者を基準にすることもあり，その際は一人の演者を中心にほかの演者が位置についていた．

6. 考察

本研究では，2 作品のリハーサル動画をもとに，振付の変更や出される指示の内容を項目別に分類することで，その意図や効果，環境がどのように影響しているか

について分析した. 現在の分類によって, 時系列に沿って指示内容の項目が推移していくことや指示内容に特徴があることが判明した. また, 2 つの作品を比較すると，特に周囲との協調に関する指示に大きく差があることから，作品の目指す方向性によって変容の仕方がかわると考えられる.

さらに, 振付・演出者である関氏へのインタビューによると，スタジオでは本番の場所のことを想起しつつも，動きの面や表現面など身体中心に稽古していたのに対して，兵庫県立美術館では空間構成をかためていき，作品性を詰める作業が中心であったと述べられていた.

本研究では, 屋外であることや, 観客の目線が劇場空間よりも上にあるという兵庫県立美術館の環境的特性によって，現在のような振付創作プロセスを生んだといえる. つまり, 振付創作プロセスは, 一度振付が完成した際に終了するのではなく，リハーサル現場や本番を行う場所で調整や再構成，新たな創造的な変化を生むことで，成り立っていくものであると考えられる.

今回は，振付者による意図的な振付の変容について詳述したが，さらにダンサー自身に自然にあらわれる変容についても明らかにしていくことが，今後の課題である.

参考文献

[1] ダンスマガジン編集部, (1999) “ダンス・ハンドブック”, 新書館

[2] 関典子（2014）“Site Specific Dance Performance 考−コンテンポラリーダンスにおける動向に着目して−”，神戸大学大学院人間発達環境学研究科 研究紀要 第 8 巻第 1 号

[3] 中野優子・岡田猛, (2015) “コンテンポラリーダンスにおける振付創作プロセス”，日本認知科学会第 32 回大会発表論文集

[4] Kirsh, D., Muntanyola, D., Jao, R. J., Lew, A., & Sugihara, M. ,(2009)“Choreographic methods for creating novel, high quality dance”, Proceedings of 5th International Workshop on Design and Semantics of Form and Movement, Taipei, Taiwan, pp.188-195.

[5] Kirsh, D., (2012) “Running it through the body”, Proceedings of the 34th Annual Meeting of the Cognitive Science Society, Sapporo, Japan, pp.593-598.